

## 短歌と現代、そして未来 駒田晶子

二〇一五年十一月、「いまとこと現代短歌」というイベントに参加した。主催は、福岡にある書肆侃侃房という出版社。第一部は、出版社が手がけているシリーズの作者達のクロストーク。第二部は、座談会へ短歌と現代。座談会が、めつぼうおもしろかった。石川美南、加藤治郎、木下龍也、永井祐、服部真里子、穂村弘の六人が事前を選んで、それぞれが現代短歌と考える十首を中心に論じる。その六十首が、一首も重ならなかったのだ。

・ヒップホッパーとひたすらしゃぶししゃぶをする私は！お前とは何が違う！アンブレラは語

恋をしている／全知／「なんたる星」2015年9月号  
・君が悪い。この牛丼は安すぎる。皆には肉が見えてないのか。

直泰／移動中毒／「なんたる星」2015年6月号

木下龍也氏の選んだ十首選より二首。木下氏が今一番おもしろいと思っ読んでいるという「なんたる星」から、すべて十首を選んだとのこと。木下氏の言葉を拾ってみる。現代短歌って何ですか？との問いには、それは私です、と胸を張って答えればよい。「短歌」の人たちは危機感がなさすぎる、自分は「短歌」の世界についても媚びながら、小説しか読まない人たちにも読んでもらえするように作っていると話す姿は、他の人を拒絶する雰囲気の中に、どこか計算して自己像を作っているような、でも、純粋に「短

歌」に恋している気配も感じられ、ああ、こんな人が出てきたんだなあ、と興味深かった。石川美南氏が選んだ十首は、斎藤史『魚歌』（1940）から、フラワーしげる『ビットとデシベル』（2015）まで。近代短歌が終わったのは、俵万智と穂村弘の登場の時だろうとする加藤治郎氏と異なった。現代短歌は、歴史のどの時点で始まったのかという考え方が、まだ決定されていないのだ、と実感した。

・闇を脱ぐ闇姫を見にゆくイタチおいで私はこんなに裸

高柳 路子  
・ロザリオのごと瞬間たまごのつらなれる一日ひと終えつつ脈はやきかも

大滝 和子

穂村氏の十首選より二首。「塚本邦雄がよい、としていた歌を、十首の内、五首も選んでしまった。現時点で、文語で近代と闘いたくないけれど、結局、口語に寄せてない歌がいい、と感じる。自分の歌集『手紙魔まみ、夏の引越し（ウサギ連れ）』は、短歌世界の人、それ以外の人、それぞれに向けて作ったつもりが、うまくいかなかった。」などなど、登壇者の短歌の歴史を視点に入っていないかのような発言に触発されたのか、ずいぶん率直に語る穂村氏が印象的だった。

最後に一つ。書肆侃侃房の社長、田島安江氏は、電子書籍化をためらわないけれど、紙の媒体も残ると思う、と会の中で発言した。わが家の十一歳は、紙の本が大好き。電子書籍も、大好き。紙の本は残ると思う？と聞いたら、残らないんじゃない？なくても困らないもの、と断言した。液晶画面に発信し拡散し消費されて終わる短歌の未来なんてあり得ない、とは言いきれないだろう。